寄せられた意見

No. 103

受付日	H18. 3. 22	年齢	５６歳	居 住 市町村名	美深町
件　名	天塩川の河川整備 そして 北海道の公共整備について				

天塩川の河川整備　そして　北海道の公共整備について

今、公共事業を計画・実施する場合、「環境にどのような影響を及ぼすか」と言うことについて、思慮なしにそれらを進めることは許されない。戦後、国土復興・整備の名の下、合理性と効率重視で様々な事業が行われてきたが、環境のために良くない工事、あるいは環境破壊そのものといった(公共事業だけではない)経済行為が確かにあったといえる。国やその地域のために「良かれ」と思って施工したものが、ちょっとした思慮あるいは長期的な視点が欠けていたために、結果としてそこに住む人々・環境に悪い影響をもたらしたと言う例は数多い。

ただ、だからと言ってこの北海道の地で、やみくもに「公共事業は悪・不要」「北海道は特別扱いできない」とするのはどうなのであろう。この考え方は、国土発展後に猛省を促された相変わらずの「合理性第一・効率重視」そのものではないだろうか。またこの道北の地で、一義的に「歩道には〇〇mおきに植樹帯を」とか、「生態系を変えないよう河畔の柳などは伐採しない」などとするのもどうかと思う。世の中の情勢の変化に従い、公共事業が次第に減少していき、"北海道も特別扱いはできない"、"省庁の一本化を"といった風潮が支配的になってきたが、これを書いていて、私どもの町の町史に関する小冊子(美深町ふるさと散歩)にあった記事を思い出した。

それは「消えた集落」というタイトルで、読んだあと非常に心に残っていたものだった。天塩川や国道40号にほど近いその集落の人々は、農業や林業で生計を営んでいたが、時代に即した生活を望むことができなかったため、結局みなその地を出て行った。
「無人となって何十年かたった今・・・・この地域に人々が生活していたとは想像もつかない荒廃ぶり・・・・・原始の林野に戻りつつある、いや戻ってしまったといえる」「人々が何十年もかかって辛苦の未開の地を開き、再度この地域の農地は自然に戻った」「かつての緩やかな斜面畑地も1．5m以上の熊笹が茂り・・・・・・十三戸の農家があったことなど誰一人判らなくなっている」
最後に、これらの集落(シマロップと御車)だけでなく、この北の地の将来を心配し、思いやる言葉でしめくられていた。北海道の多くの町は、きちっとした国をあげての思いやりがないとすぐに自然に帰ってしまうのではないだろうか。空気がきれいで広々とした土地もあるのに、そこが見棄てられ、排気ガスと人ゴミの都会にばかり人が住もうとする(住まざるを得ない)世の中は、やはり絶対におかしい。

話がまた横にそれるかもしれないが、もうひとつ。先日の新聞に、先駆的な地域医療に取り組んできた診療所の所長が、町村合併の際の医療政策をめぐる対立から辞職する、とあった。合併した町の財政では困難だから、とのことだが、結局その診療所がある地域の医師は一人となり、入院や一部の救急診療は休止になるとのことだった。結果的に合併により、その地域の医療は合理化・効率化のために見棄てられたような形になってしまった。

自然は大事にしたい、だけれども効率・有効性ばかりで都市中心に国の事業が行われるならば、地方を滅ぼすことになるのではないだろうか。河川整備計画も将来を見据えて、自然保護団体が反対するから事業をやめる・縮小するというのではなく、この地方のために進めていって欲しいと思う。地方の人がみな出て行き、広大な農地がどこかの国みたいに飛行機で農薬を散布するようなことにならないことを願います。

平成18年3月22日　　56歳　　中川郡美深町　[redacted]

※ [redacted] 箇所は、個人情報等に該当するため黒塗りしています